



ギフト争奪戦に乗り遅れたら、 ラストワン賞で最強スキルを 手に入れた 1

α L P H α L I G H T

みももも
Mimomomo

登場人物紹介

ユータ
 ↳
 いつきの存在を目のかたきにする赤髪の勇者。

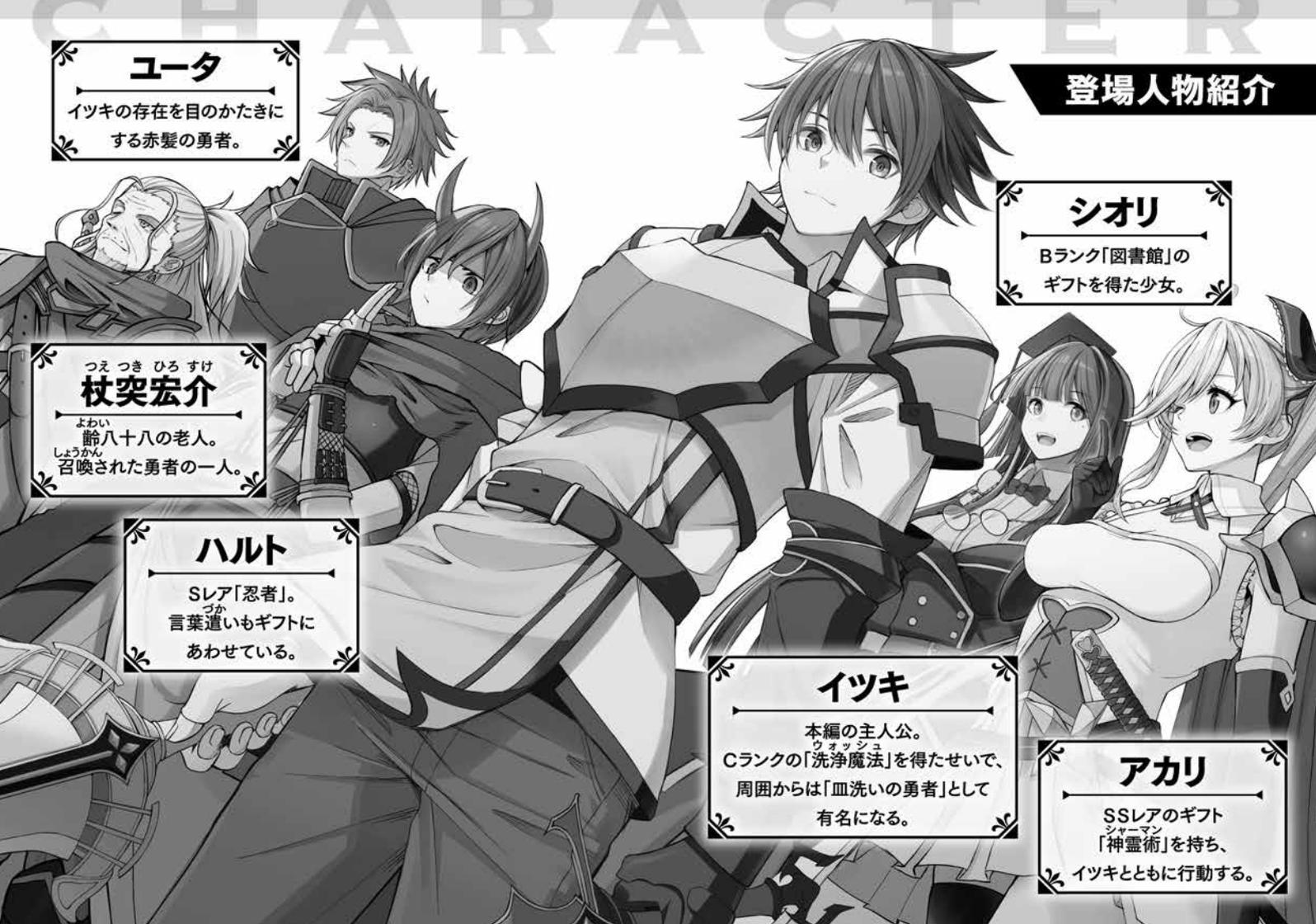
シオリ
 ↳
 Bランク「図書館」のギフトを得た少女。

つえつき ひろすけ
杖突宏介
 ↳
 よわい 齢八十八の老人。
 しょうかん 召喚された勇者の一人。

ハルト
 ↳
 Sレア「忍者」。
 ぶか 言葉遣いもギフトにあわせている。

イツキ
 ↳
 本編の主人公。
 ウオッシュュ Cランクの「洗淨魔法」を得たせいで、
 周囲からは「血洗いの勇者」として有名になる。

アカリ
 ↳
 SSレアのギフト
 シヤーマン「神靈術」を持ち、
 ↳
 イツキとともに行動する。



目次

序章	異世界の狭間にて	7
第一章	冒険の始まり	15
第二章	魔王の侵攻 <small>しんこう</small>	131
第三章	魔界への逃走	224

序章 異世界の狭間にて

拝啓。

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

突然ですが、皆さんは勇者として異世界に召喚されることになりました。

戸惑っておられるんですね。ええ、ええ。気持ちよくわかります。

「当然ながら「元の世界に帰してくれ」というリクエストにはお応えできません。

理不尽に感じるかもしれませんが、雷に打たれたようなものと思って諦めてください。

代わりに皆さんには、ギフトを授けたいと存じます。

いわゆる「オレツエー系ギフト」ってやつです。

このギフトがあれば、召喚先でも大活躍間違いなしですよ！

ただやはり、優秀なギフトは数に限りがございます……

ということで今回は、ギフトを選ぶのは早いもの順にしようと思います！

大当たりのSSレアが一点、同じぐらい当たりなSレアも一点。そして、Sレアの

ギフトはなんと三点もありますよ！

ギフトの内容は、カードに書いてテーブルの上に置きました。ギフトを決めた人はカードを持って、こちらの門を通り抜けてください。門を通り抜けた時点でギフトが確定し、召喚先の世界へと転送されます。

さあ、ギフトを選ぶのは早いもの勝ちですよ！ 急いで、急いで！！

敬具

……だ、そうだ。

あれは昼頃だっただろうか。

学校帰りの電車の中で突然めまいがして意識を失った俺は、目が覚めたら知らない空間に立っていた。

今思えば、あの立ちくらみに似た現象こそが、召喚の予兆というやつだったのだろう。

足元に魔法陣が浮かんで……とか、そういういかにもな演出がなかったのは残念だが、まあそんなことに文句を言っても仕方ないか。

転送された異空間には俺以外の人間も大勢いて、半額シールの貼られた弁当を奪い合うかのごとく「我先に！」とギフトに群がっていた。ギフトの種類は手に取って見るまでわからないのか、「これでもないこれでもない」と手に取っては投げ捨て、次を拾ってはま

た投げ捨てている。まるでギフトがゴミのようだ……

そして俺はというと……そんな様子を眺めながら、半ば諦めモードに入っていた。

俺の名前は明野樹。歳は十七、高校二年生。

運動神経もイマイチだし、手先が器用なわけでも、何か特技があるわけでもない。

あえて何かあげるとすれば、漫画やライトノベルを結構読むことで鍛えられた妄想力とか想像力とか……それでも上には上がいるから、大したことはない。小説を書いたこともないし、絵がうまいわけでもない。妄想ぐらいなら誰にでもできるからな。

ついでに言うなら、運もあまりいい方ではない。そういう意味では運任せのガチャみたいなやつじゃないだけ、俺にも勝ち目はあったのかもしれない。だけど、血眼になって相手を押しつけてでも目的のギフトとやらに必死になれるような、やる気も気概も持ち合わせてはいない。

結果として俺は、こうして傍観者の立場を取ることになった。まあ、あれだ。俺なんてのはああいったやる気に満ちた陽の者と比べたら、それこそ路傍の石みたいなものだろう。

自分で言っていて悲しくなるが。

それにしても、リア充っぽい若者や堅物そうなスーツを着たおっさんまでギフトの争奪戦に参加しているのは、見ていて少し意外な感じがする。

いかにも「アニメなんて興味ないです」って風貌の、いわゆる表の世界の住人たちが必

死になっているのを見せつけられて、俺みたいなオタクの代表みたいな立場の人間は逆に尻込みしりこみをしてしまうというか。

……でも多分、俺みたいな落ちこぼれと世にはびこる勝ち組との違いは、今みたいな大事な局面をしっかりと見極めて、そこで人目も気にせず本気になれるかなれないか——そんなところなのかもしれないな。

勝つために必死になれるからこそ強い力を手に入れて、それで世界の上位に収まっているわけだ。つまり、俺は戦いに参加する資格すら持っていなかったということか。

……まあでも贈り物ギフトというぐらいいのだから、最低ランクでも役に立たないことはないだろう。

できれば召喚先でちよつとした有名人になれるぐらいの有能スキルではあつてほしいが、逆に言えば俺はそれでも十分だ。

元の世界に未練があるわけでもないし、召喚先の世界で自分が勇者になるなんて、俺には想像もできない。

なんかバツとしないけどちよつと珍めづしいぐらいの能力を手に入れて、それで悠々自適ゆうゆうじしよにスローライフを……つても悪くならう。

続々と、ギフトを選んだ人たちがゲートのような門をくぐって姿を消していくのを眺めていると、人込みを抜けて一人の女性がこちらに向かって歩いてきた。制服を着ていて俺

と同年代のようだから、女子高生なのだろうか。

「やあ、君はギフトを選ばないのかい？」

「まあ俺は……つて、誰だ？ 知り合いじゃないよな？」

「私？ 名乗るほどでもないけれど、要するに君と同じ召喚者つてやつだよ。次の世界では勇者になるつもりだから、顔だけでも覚えておいてね！」

「だったらこっちも名乗らなくてもいいよな。……で、俺に何の用だ？」

「いやいやだから……もしかしてさっきのアナウンスを聞いてなかったのかな？ ぼーっとしてると、優秀なギフトはなくなっちゃうみたいだよ？」

「そういうお前はいいのかよ。こんなところで俺みたいなのを相手して……」

「私？ 私は大丈夫。ほら、私のギフトはもう確保してあるからね！ 見てよ、たまたま手に取ったのがSSレアだつて！ すごいでしょ」

ほらみるよ。結局世の中はこういう人間が勝ち抜くようにできているんだ。

「……ちよつかりしてるな。なるほどそれで『次の世界の勇者』つてわけか。だったら俺はこのままいけば、次の世界ではホームレスにでもなるだろう。せめて顔だけでも覚えといてくれ。んでもって、もし向こうの世界で出会ったら、そのときは施ほししてもしてくれ。現金でもいいし、レアアイテムでも構わんぞ」

「君、面白いことを言うね！ いいよ、わかった。だったら、勇者むたしのパーティーで荷物持

ちぐらいいさせてあげるよ！ ……さあ、そんなことを話している間に、他の人は全員選り終わってる。残っているのも、君の分のギフトだけみたいだね。私は先に召喚先の世界に行ってるから！ んじゃ、またね!!」

「…：騒がしい女だ」

いきなり声をかけられたので適当に話を合わせていたら、いつの間にか周りは静かになっていった。

あの女も光り輝くゲートを通り抜けてからは気配が消えた。

残されたのは、俺一人。みんなが群がっていたテーブルに向かうと、ギフトの内容が書かれているカードが一枚だけ残されている。

残り物には福があるなんてことわざがあるが…：まあ期待はできないだろうな。

スキル名：洗淨魔法

スキルランク：Cランク

概要：指先で触れた場所を少しずつ綺麗にする。

手に取って確認すると、俺に残されたのは掃除用のギフトだった。

効果は汚れを落とすこと。戦闘に使えそうにないというだけでなく、効果範囲も指先だ

け…：…と。

想像以上に汎用性のないスキルでびっくりしてるけど、まあいいや。

俺がそんなことを考えていたら、突然、どこからファンファーレが聞こえてきた。

パパババーン！

おめでとーございます！

最後に選ばれた方には素敵なラストワン賞がございます！

おまけのギフトをお受け取りください！

スキル名：聖剣／魔剣召喚

スキルランク：ラストワン

概要：聖剣及び魔剣の召喚が可能(時間制限あり)。召喚可能な時間は召喚者のレベルに応じて変化する。召喚者のレベルが1の場合、十秒間の召喚が可能。十秒経過で自動的に消滅し、任意のタイミングで消滅させることも可能。消滅後は、召喚者のレベルに応じた時間だけ再召喚が行えない。召喚者のレベルが1の場合、召喚時間一秒につき三十分再召喚不可。聖剣と魔剣は別枠扱いとなるため、同時に召喚が可能。聖剣消滅直後に魔剣を召喚することも可能。聖剣召喚時、聖剣を持つ人間は『スキル：聖化』が発動し、聖人と同等の神聖力適性を獲得する。魔剣召喚時、魔剣を持つ人間は

『スキル・魔化』が発動し、魔族と同等の魔力適性を獲得する。聖剣スキル……

ファンファーレとともに現れたもう一枚のカードを手にとって確認すると、そこには紙面を埋め尽くさんばかりの説明文が書いてある。

なんだこれ、おまけってレベルじゃない……

第一章 冒険の始まり

「おおっ！ これでついに、すべての勇者様が揃いましたな！」

ゲートを通り抜けると、そこはまはゆいぐらいに明るい空間で、目をしばしばさせながら周りを見れば、どうやらさっきの空間にいた人は全員ここに集合しているみたいだ。

足元を見ると、魔法陣の残光がある。ということは、俺たちをこの世界に召喚した連中がこのあたりにいるのは間違いないだろう。

落ちていて周囲を見渡してみると、元の世界には戻れないと説明されているにもかかわらず、悲観的な顔をした人はあまりいないように見える。もしかしたら、誰しも「新しい世界への旅立ち」を潜在的に望んでいたのかもしれない。

「それでは最後の勇者様、まずはあなたのギフトを教えてくださいいただけますかな？ 先に来たものたちからはすでに聞いておりますので」

先ほども声を上げた、魔術師のようなローブを着た老人に声をかけられたが、どう答えるべきだろうか。

おまけでもらったギフトのことまで話すべきか、それとも今は黙っておくべきか。正直、全てを話すのは気が進まない。強い力を持つていてことを知られたら戦場に放り込まれかねないし、最悪の場合は国から危険な敵と認定されてしまう恐れもあるようななんて、さすがに妄想が過ぎるか。

しかし、秘密にしていたことがバレたら、それはそれで面倒なことになりそうな気もする。やはりここは素直に話しておくことに……

「おい、早くしろよ！ お前のギフトは洗淨魔法だろ！ 最後の二つから選んだのは俺だ。お前には一つしか残っていなかったはず。どうせこの世界の役には立たない雑魚スキルなんだから、もったいぶらずにとっとと話せよ！」

今まさにそのことを話そうと思っていたのに！ 誰かと思つたら小学生ぐらいのクソガ……お子様が偉そうに。

まあ否定はできないけど！ そういうお前は俺の次に弱いスキルなんだろう？ なんてそれで偉そうなことを言えるのか……

「……勇者様、彼の言っていることは本当ですか？」

「ええまあ、概ね間違っていない。私のギフトは洗淨魔法という、触れたところを綺麗にするスキルのようです」

「そうですか。かしこまりました、情報提供ありがとうございます」

俺が「洗淨魔法です」と言った瞬間にこのジイさん、目に見えてがっかりしやがった。

確かにこつちのギフトは、戦闘の役に立たないギフトだし、世界を救おうとしている人からしたら意味がないのかもしれないけれど、せめてそこはもう少し大人の対応をだな。

そうだ。後方で衛生管理とかの支援をする人がいて、初めて人は前線で戦えるんだぞ！ なんてそれっぽいことを思ってみたり。まあ口には出さないが。

「それでは全ての勇者様が揃いましたので早速、僭越ながらわたくしから説明をさせていただきます。皆様をこの世界の勇者としてこの場に召喚したのは我々、王宮の魔術師団でございます。我々は神々の力を借りて皆様を召喚したのですが、その目的とはまさしく魔王の討伐でございます！」

このあたりはなんていうか、大体想像通りだな。わざわざ勇者を召喚する理由としては、戦争とか魔王討伐とかが定番だからな。

「我々の世界は、魔王によって滅びを迎えようとしております。そこで皆様には、勇者として魔王と戦っていただきたい。我々はサポートをさせていただきます。必要なものがあればなんでもおっしゃってください。限度はありますが、可能な限りお手伝いさせていただきますませうぞ！」

それは……俺みたいな清掃スキルを持っている人にまで有効なのだろうか。望み薄だとは思うが、そのうちダメ元で頼んでみようかな。

「さて、それでは勇者様がたには早速魔王討伐の準備をさせていただきたいのですが、その前に我々から皆様に最低限の旅の必需品を進呈させていただきます。どうぞお納めください！」

そう言ってジイさんが手をパンパンと打ち鳴らすと、扉が開いてメイドや執事が次々と入室してくる。

どうやら担当があらかじめ決められているようで、勇者一人につきメイドか執事が一人ずつ、鞆が載せられたお盆を両手で持った状態でやってくる。

俺の前に立ち止まったのは、まだあどけなさの残る幼いメイドさんで、若干頼りないような気がする。

幼メイドもお盆に載せた鞆を持っているのだが、なんか汚れているというか、中古品のように見えるのは気のせいだろうか。

改めて他の勇者の使用人たちが手にしている鞆を見ると、新品らしきものもあれば、少しくたびれたものもある。

ちなみに、俺のギフトの内容を暴露した少年君の目の前にいるのは、年をとりすぎたおじいさんで、鞆も俺のほどではないがかなりぼろくなっているようだ。

つまり、この時点からすでに王宮による差別は始まっているのだろう。まあ、これだけの人数の装備やら何やらを用意するのは大変だろうから仕方ないのかもしれないけれど、

これでは先が思いやられるな……

「はい、どーぞ！ ゆーしゃさま、頑張ってくださいね！」

「はいどーも。ありがとね」

「きゃー！ ゆーしゃさまに声をかけてもらいました、きゃー！」

女の子は俺に鞆を渡してそれだけ言うと、恥ずかしそうに顔を隠して走り去ってしまった。

他の勇者たちも同じように鞆を渡されていたのだが、渡すだけ渡して逃げたのは俺の目の前にいた幼メイドだけだった。

仕方ないので、隣で説明しているメイドさんの話に耳を傾けると……「私はあなたの専属メイドとなります。困ったことや、わからないことがあったら聞いてくださいね」とのことらしい。

要するにアドバイザー的な役割で、俺の場合は、あの幼メイドがアドバイザーってことになるようだ……

「皆様、鞆は行き渡りましたかな？ それではまずは、鞆の中に一枚のカードが入っているの、取り出してご確認ください。そちらはステータスカードという、召喚者に限り登録と使用が可能な魔道具で、その名の通り登録したもののステータスを表示できる

機能を持っておりませぬぞ！ 試しに取り出してカードに向かって『ステータスを確認したい』と念じてみてくだされ！ それで登録も完了いたします！ 初めのうちは苦労するかもしれないが、伝承によればすぐに慣れるらしいので、今のうちから練習しておくとよいですぞー！

ステータス確認と聞くだけで内心ワクワクしてしまう俺もいる。つっても、現時点で表示されるのは残念ギフトとラストワンギフトの二つだけなんだろうけどな。だって、まだレベル上げとかしてないし。

まあでも一応、念のために確認だけはしておくか。えっと、カードに向かって……ステータス確認、ステータス確認、ステータス確認、ステータス確認！ ……ああ、やっと表示された。

カードを確認してみると、プラスチックのような半透明なカードに赤い文字で俺のステータスが記載されている。

明野樹

年齢：17

レベル：1

ギフト1：洗淨魔法

ギフト2：聖剣／魔剣召喚

やはりこれは、うかつに他人に見せない方がいいだろう。「ギフト2」の部分は特に。

カードに向かって「消える」と念じたら、今度は一発で非表示になってくれたが、これはたまたま時間切れで非表示になったのか、それとも俺の念が通じた結果なのかは定かではない。まあどちらでもいいか。

とりあえず今は、カードは鞆の中にしまつておこう。

「確認していただけましたかな？ さて、長々と説明ばかりしていても仕方ありませんね。気になることがあったらメイドや執事に尋ねてください。それではこの場は解散としましょう。皆様の健闘を祈っておりますぞー！」

最後にその言葉を残して、説明を行っていたジイさんは出口から退出していった。

残されたものたちはすでにあちこちで「俺と一緒に旅に出ないか？」みたいなナンパまがいの会話を繰り返している。まったく、お盛んなこった。

だが俺は興味ない（強がりと言ってるわけじゃない！）から、こんな場所は早々に退出することにしようかな……



「おや、お早い出立いっしょうちだちですな。勇者様は仲間を集めなくてもよろしいのですかな？」
 「いや、わかってるでしょう。俺みたいな見えてる地雷地雷を仲間仲間にしようなんてやつがいないことは。それよりもジイさん、聞きたいことがあるんですが」

扉から外に出ると、さっきのジイさんがベンチに座って休んでいたので、とっ捕つかまえて色々聞いてみることにした。

とはいえ、このジイさんは俺のギフトのことを外はずれだと思ひ込んでいるだろう。だからいきなり「レベル上げに効率のいい狩場かりばはどこか」などとわずに、「安全にレベルを上げられる場所がないか」と聞いてみることにした。

そうだな。ギルドとかでクエストを受けて、金や経験値を稼かせげるシステムだったら助かるんだが……

「レベルを上げるといのは、つまり戦いの訓練を積たみたいということですか？ この国でも戦いの達者たつしやなものは、この街を出て東へまっすぐ進んだ場所にある魔物の森で訓練しているという話をよく聞きますぞ。ですがあなた様の場合、それはやめた方がよいでしょう。ハハッ、皿洗いなど、わしにでもできますのじゃ！ おっと失礼！」

いや、笑いながら言ってるけど、本当に失礼だからな？

「……じゃが、森の外に湧わき出る程度の魔物であれば、子供でも危険はほとんどありません。まずはそのあたりで剣を振るう練習でもしてみるのはいかがかな？ まあそれだけで簡単に強くなれるとは到底思えませぬが」

この反応を見た感じ、もしかしたらこの世界では、レベルという概念概念はあまり一般的ではないのかな。確か「ステータスカードは召喚者にしか使えない」と言っていたし、レベルが上がったとしても、この世界の人たちはそれを確認する方法がないのだろうか。ということは、少し聞き方を工夫する必要があるのかもしれないな。

「そっすか。ちなみに、皿洗いをするだけで強くなれるとか、そういうことはないんですか？」

「何をおっしゃる、そんな便利なことがあるわけないでしょう！ ですが、お金を稼かせぐ必要はありますな。大抵の商会にはクエストボードというものが置いてあり、そこで仕事を受けることができますのじゃ。お渡しした支援金がなくなる前に、安定して稼かせげるように努力はした方がいいのかもしれないな」

「そりゃそうか……まあ、ありがとうな。とりあえず色々試してみることにするよ」
 「安心せよ、本当に路頭みちづちに迷まようようなことがあつたら、王宮でわしの弟子でしとして雇むとってやるわい！ そのときは衣食住いしょくじゆぐらいは確保してやった上でこき使つかってやるから、今は安心して色々なことに挑戦してみるのじゃ！」

ジイさんはいきなり態度を変えてきた。だが、これはこれで悪い気分はしない。それに

これなら、俺も遠慮はしなくてもいいだろう。

「ジイさんの助手なんか、こっちから願い下げだ。意地でも稼げるようになってやるからな！ 見てろよ、クソジジイ」

「誰がクソジジイじゃ！ これでもわしはこの国でトップクラスの魔術師なんじゃぞ！ 普通なら『弟子にしてくれ』と頭を下げられる立場なんじゃぞ！ おい、聞いておるのか？ よいか、困ったら悪事に手を染める前にまず、必ずわしのところに来るのじゃぞ！ わしの下で働くのが嫌というのなら、この城の厨房でもどこでも、仕事を紹介してやるからの一！」

そんなアフターサポートがあるなら、異世界召喚も悪くないのかもしれないな。

まあ、俺はともかくとして、俺につられて強力なギフトを持つている他の勇者たちが犯罪集団に入るのを防ぎたいという思惑があるだけなのかもしれないが。

そして、運よくいい情報も聞けた。魔物の森か……。いかにもそれっぽい名前だし、強力な魔物とかも出るのかもしれない。久しぶりにワクワクしてきたぞ。とはいえ、まずはこの街の近くで出てくる弱い魔物を倒しながら、コツコツレベル上げをしないと。

「それじゃあ、俺は行くよ！ またな、ジイさん！」

「まったく……気をつけるのじゃぞ。くれぐれも無茶はせぬようにな！」

ジイさんに別れを告げた俺は、王宮の庭で仕事をしていた庭師に魔物の森がある方角を聞いて、そのまま多くの人々で賑わう街を素通りして、街の巨大な門も通り抜けて、街道に出た。

この街道をまっすぐ進めば魔物の森にたどり着くらしいが、今回はそこまで行く気はない。今日はこのあたりで出現するという、いわゆる雑魚モンスターを倒してみようかな。

とりあえず素手で戦うのは無理があるから、どこかで武器でも仕入れようかと思っていた。そうしたら、街の門を通り抜けるときに「どうぞ勇者様、お好きな武器をお使いください」と守衛に勧められた。

勇者のために用意されたであろう、剣や槍、弓矢にこん棒まで、一通りの武器があった。俺はとりあえず使いやすいそんな短めの木剣と、魔物の解体に便利だという小型のナイフを受け取っておくことにした。

いかにも武器武器しい刃物を持ち歩くのは怖いし、下手したら俺自身の体が傷つきそうだし。まずは殴つても使えるような武器で、戦い自体に慣れる必要もあるしな。

ちなみに守衛によると、このあたりで出現するのは基本的な苔団子と呼ばれる魔物だけで、討伐することができれば苔の塊というアイテムが手に入るらしい。

守衛に感謝を告げて門を抜け、街道を歩いていると、道から少し離れた位置にマリモのような巨大な苔のそのそと動いていた。近づいてみれば、身長が百七十センチ以上ある俺でも見上げなければならぬほどでかいのだが、動きは鈍い。そして、いつまで

経っても俺に襲いかかってくる気配はない。

「これが、話に聞いた苔団子で間違いなさそうだな。まさに名は体を表すところか。さて、じゃあ試しに……まずは木剣で一刺ししてみるか！」

思い切り木剣を突き刺してみると、弾かれるような感覚は一切なく「ボスン」という気の抜けた音とともに中に入っていた。そのまま上下に動かそうとしても、絡まっているのかうまくいかないが、引いてみたら簡単に引き抜くことができた。もちろん、それだけでこの苔団子を倒せるわけではなさそうだが……

「あのジイさん、『危険は少ない』とは言ったが『倒せる』と言わなかったのは、そういうことか」

試しに木剣を振り下ろしてみるが、今度は「ポヨン」と弾力のある音で弾かれてしまう。ならばということ、解体用のナイフを使って切り落とそうと頑張ってみるも……ちゃんと刃は入るのだが、切れ目を入れた瞬間から再生が始まってしまったため、結局うまく切り落とすことができなかった。だめだこりゃ。

「仕方がない、できれば魔物の森まで温存したかったんだが……ラストワンを試してみるか。えっと、スキルの発動方法は……」

聖剣を召喚する方法なんて聞いてもないが、ステータスカードの表示と同じ方法で行けるだろうか。試してみる価値はあるかもしれない。

聖剣、聖剣、聖剣……聖剣！

強く何度も念じていると、やがて右の手のひらの上にはほんやりとした光の粒が見えるようになってきた。

「これは……剣？」

試しに光の粒を握り込んでみる。すると、突然何かを握った感触がした。手のひらを見ると、精緻な飾りのついた剥き出しの剣が現れていた！

重たい剣を手にしたはずなのに、なぜか体は逆に軽くなる。今ならその場でジャンプするだけで五メートルは飛べそうだ。

視覚や聴覚なんかの五感もかなり鋭くなっているみたいで、苔団子の細かい苔一つ一つの様子まで見えるし、ここからかなり離れている街の人たちの話し声までなんとなく聞こえてくる。

そういえば、ギフトの説明のところに「剣を握っていると聖人になれる」みたいなことが書いてあった気がするが、その効果だろうか。

しかし、のんびり検証している時間はない。というのも、この剣を握り込んだ瞬間から、俺の視界の右上に10、9、8……とカウントダウンが表示されているから。

なるほど、これが時間制限のメーターなのか。わかりやすくて助かる。だが今はこの剣で苔団子を攻撃するのが最優先だ！

「食らえ！ えっと、聖剣、突き！」

剣に触れた苔団子は一瞬にして消し飛んで、残されたのは小さく光り輝く苔の塊だけだった。そして同時にカウントダウンのメーターがゼロになり、聖剣の感触が右手から消滅した。代わりに、視界の右隅には299という数字が表示されている。

確か説明だと、一秒につき三十分使用不可能になるんだっけ。ということは、今俺は十秒丸々使ってしまったから三百分、つまり五時間は聖剣の再召喚ができないわけか。

え、それってもう今日は使えないと思っただ方がいいんじゃないか？

パパバーン！

苔団子の落とした苔の塊を拾って鞆に入れようと腰をかかめると、突然頭の中にファンファーレが鳴り響いた。

何事かと思っただが、試しにステータスカードを確認したら、レベルの欄が3になっていた。どうやら、これだけで早速レベルが上昇したようだ。

ちなみに右上のカウントダウンは、レベルが上がってリセットなんてことにはならないみたいで、相変わらず299と表示されている。

でもなんだ、レベル上げて思ったよりも簡単じゃないか。……ギフトさえ自由に使える話だけだ。



その後、せっかくだから「魔剣の方も試してみよう」と思って街道を歩き回ることにしたのだが、なかなか苔団子には出くわさなかった。

正確には、一体や二体が点在していることはあったのだが、時間制限のある武器を使うこちらとしては、もう少し密集してくれていた方がありがたい。

そんなわけで、結構長い間あちこち走り回っていると、運よく四体の苔団子が密集しているのを見つけたので、今度は一度の魔剣召喚で十秒のうちに四体倒すことに挑戦する。

息を整えて魔剣を召喚し、一息の間に四回剣を振り回すと、無事に四体の苔団子を倒すことができた。ただ、剣を振り慣れていないこともあって、余裕がある感じではなく、ギリギリ間に合ったようなものだった。

せっかく強いギフトを持っていても使いこなせないのではもったいないし、今後は剣を振る練習とかもしてみようかな……どう考えても付け焼き刃にしかならないだろうけど。

四体の苔団子を追加で倒したおかげで、レベルは5まで上がったが、同時に俺はあと半日近く、本当に皿洗いしかできない勇者になってしまったことになる。

それにしても、最初に苔団子を倒したときはそれだけでレベルが3まで上がったのに、今度は四体倒しても5までしか上がらなかった。当たり前といえば当たり前なんだろうけど、レベルが上がるほど必要な経験値が増えて、同じ敵を倒してもレベルが上がりにくくなるようだ。

苔団子が密集している場所を探すのに結構時間がかかってしまったので、たった五体の苔団子を討伐しただけなのに、気がついたらすでに日が傾きはじめていた。

視界の左隅には299という魔剣再召喚までの時間が新たに表示され、右隅の数字は218まで減っている。300から引くと、八十二分。

このタイマーを信じるなら、どうやら気づかないうちに一時間以上経っていたみたいだな。

「さて、それじゃあさすがに、そろそろ街に戻るか！」

苔団子を求めているうちに、魔物の森の手前まで来てしまっていたようだ。ここから街までは結構距離があるが、だからといってこんな場所で野宿するわけにもいかないから、速足で街まで戻ることしよう。

レベルが上がったおかげなのか体力も増しているらしく、以前の俺だったらとつくに音を上げているような距離を歩いているにもかかわらず、まだ余裕があるのはありがたい。

途中で苔団子が五体密集していた気もあるが、もう魔剣も聖剣も使えないのだから、気づかなかったことにしよう。

そんな感じで十分ぐらい、結局途中で小走りを変えたりもしながら移動を続けると、ようやく街の明かりが見えてきた。

振り返るとちょうど日が沈むタイミングで、綺麗な夕焼けが見えたけど、感動している

ような暇はない。とつとと街に戻って飯と宿を探して、のんびり休むための準備をせねば。てか常識的に考えればそういうのは普通、旅に出る前に手配しておくものなのかもしれないが。

まあ俺もなんだかんだ言っつて、異世界の冒険ということではしゃいでいたのかもしれないな。

「おや、おかえりなさいませ。お待ちしておりましたよ、勇者様！」

出発したときの門をくぐって街に戻ると、昼間と同じ守衛がそこにいた。

「ああ、あなたは昼間の。まだお仕事終わらないんですか？ お疲れ様です……」

「いえいえ、もうじき交代の時間なのでお気になさらずに。どうでした？ 苔団子には出会えましたか？」

「はい。なんとか五体、倒すことができました。あ、そうだ。木剣とナイフをお返ししますね」

「これはどうもご丁寧に。たったこれだけの時間で五体も倒されたのですか！ さすがは勇者様ですね！」

確かに、聖剣や魔剣がなければ倒すことなどできなかっただろうけど、まあ「勇者だから」ってことにしておけばいいか。

「はい。勇者にはギフトという便利なものがありますから……ところで、これから夕食を

取ろうと思っっているのですが、オススメの店とかありますか？」

「そうですね……やはり人気があるのは大通りの飲食店でしょうか。お酒が美味しいお店なのですが、料理の方も絶品です！ 街に入っつて一番大きな通りを王宮に向かつて歩いていけばすぐに見つかるはずですが、もうじき混みはじめますので、急いだ方がいいですよ！」

「ありがとう！ 助かったよ！」

「いえいえこちらこそ、お役に立てたようで何よりです！」

もしかして、この世界には親切な人が多いのだろうか。この守衛もそうだし、王宮魔術師のジイさんも色々気を遣ってくれてるしな。

突然この世界に召喚されたときは「第二の人生を楽しめればいいか」ぐらいに考えていたけど、親切にされたら返してやりたくもなる。まあ、ほどほどにはあるけれど、この世界のためになら戦ってやってもいいかな……なんてな。

本当に魔王と戦うような仕事は、SSSレアのギフトを引き当てた、顔も知らない別の勇者に任せておけばいいとして。俺はその裏で、魔王軍とかそういうのから街を守る感じの美味しいポジションに……。なんて、ここまで行くとさすがに取らぬ狸の皮算用と言われそうだが。

守衛に紹介された店に行つて、料理が来るのを座つて待つっていると、続々と人が集まつてきて、守衛が言っていた通り、あつという間に満席になってしまった。

日が暮れきるよりも前に店に入ることができて、大正解だったのかもしれない。気づいたら店の外にまで行列ができていた。

しばらく待つていたら、混雑した店内を縫うようにして料理を持った店員が近づいてくる。

「お待ちせいたしました！ 本日のおすすめ定食、大盛り無料サービスでございます！」

「おお！ キタキタ。魔物の肉のステーキと聞いてたが、なかなか美味そうじゃないか！」

「どうぞお召し上がりくださいませ！」

出てきた料理はジュウジュウと音を立てていて美味そうだし、店員の接客もなかなかいい。さすがは守衛が勧めてくれただけのことはある。

ちなみに料金は前払いで、注文するときにすでに支払っている。毎日この料理を食べ続けると、支援金が一ヶ月で底を尽きてしまうぐらいなので、なかなかの贅沢なのかもしれない。だが、初日ぐらいは許されるだろう。

ただ、調子に乗つて大盛りを注文したら想像以上に大盛りだったので、食いきれるかと

うか心配ではあるのだが……俺はなんて贅沢な心配をしているんだろう。

早速料理にかぶりつこうと、右手にナイフ、左手にフォークを握りしめて舌なめずりをする……急に店の入り口の方が騒がしくなってきた。何か面倒ごとでも起きたのだろうか！ 視線を向けてみれば、王宮で見かけた顔がちらほらと見受けられる。どうやら店員と採め事になっているようだ。

「ちよつと、お客様？ 困ります、順番は守っていたかないと……！」

「うるさい！ こっちは勇者のパーティーだぞ！ だったらもちろん、俺たちが優先だろ。それとも、俺の能力を今ここで体験させてやつてもいいんだぞ？」

「そんな……！」

あ、やべ。

「貫い物のギフトがあるってだけであんなに偉そうな態度を取れるとか、逆に尊敬できるレベルだな」って考えながらポツと眺めていたら、あいつらと目が合ってしまった。慌てて視線を下げるけど……多分無駄なんだろうなあ。

「おい、おいおい！ なんてあいつが先に飯を食ってるんだよ、しかもあんなに美味そうなステーキを！ あいつはよくて俺はよくないってか？ そんなの不公平だと思わないんすか？ なあ、店員さんよお」

「彼は先に来て注文してただいておりますので……！」

「なあおい、皿洗いの君よ！ ちょっとその席、俺らに譲ってくんないか？」
 「はあ……めんどくせえ」

まあでも確かに混雑していることは事実だし、店のためにも少し急いで飯を食うぐらいのことはしてやってもいいのかな。

そう思ってステーキにナイフとフォークを当てて食事に戻ろうとしたら、なんとやつらは他の客を押しつけてまで、わざわざ俺のところに歩み寄ってきやがった。

俺を威圧しているつもりなのかもしれないが、悪いが俺は中学時代にいじめられた経験から、「暴力に尻を怖してもあまり意味がない」ことを学習している。むしろ怖がった様子を見せてしまうと逆効果だ。ここは無理してでも強気に……肉でも食うことにしよう。

一口サイズにナイフでカットしたステーキを、今にもフォークを落とすまいような震えを抑えて口元まで運び、食う。うん、美味い。

「なあ、おい！ 皿洗いの君は、とっとと裏に戻って皿でも洗ってこいよ！」

「ガハハハハ！ 言い得て妙だな、おい皿洗いの。俺のギフトは感覚強化つつつてな、お前がガクガク震えながらビビりまくっていることには気づいてんだぞ！ とっとと逃げ出して、その席を俺らに譲っちゃいな！」

くそう、視界の右隅の聖剣メーターが200近い数字を表示させていなかったら、もう少し勇気を持てたのかもしれないけれど……

でもまあ、俺の勇気もこのあたりが限界かな。今すぐ俺がこの席を離れば、やつらも満足するだろう。……せめてこの料理を持ち帰ることができるといいんだけど。店に頼めばラップに包んでもらえたりするのかな……

諦めて席を立とうとすると、俺に突っかかってきてたやつらのさらに後ろから「ねえ、邪魔なんだけど」と、あきれたような声が聞こえてきた。

「ていうか、ねえ。ちょっと君たちに聞きたいんだけど……その、恥ずかしくないの？ いや、これは侮蔑とかじゃなくて純粋に尊敬してるんだけど。どんなメンタルしてたら、そんな行動を取れるの？」

「なんだあ？ 部外者は黙ってろ！」

誰だか知らないが、火に油を注ぐようなことはしなくても……。というか、顔は見えないが、どこかで聞いた声のような？

「あ、ごめん。確かに私、君たちからしたら部外者だよな。だけど、店の通路の真ん中で仁王立ちされると邪魔なんだよね。演劇の練習なら店の外でやってくんない？」

「ああ？ なんだお前、俺らに喧嘩売ってんのか？ 一戦交えようってか？ 俺らはこの世界に召喚された勇者様ぞぞ？」

「自分に対して様づけて……見た目の割に随分と幼いんだね。てか奇遇じゃん！ 私もこの世界に召喚された勇者だよ！ ね、最後の勇者君！」

面倒くさい自称勇者様方をかき分けて俺の前に姿を現したのは、転移前の空間で俺に話しかけてきた騒がしい女じゃないか。普段だったら関わりたくない女性ランキングのトップを独走しそうなもんだが、今この状況でもグイグイ不良どもを攻めてくれるのは、正直助かる。

「なんだったら俺にしては珍しく「何らかの形で恩返しをしてやってもいい」って感じるぐらいに。やばい、この女が救世の女神に見えてきた。不良に絡まれたせいで、メンタルが相当弱っているのかもしれない……」

「それでどうするの？ そつちが勇者ならこつちも勇者だよ。だったら決闘でもする？ 私、こう見えても強いよ！」

だよな。確かSSレアのギフトを引き当てたんだっけ？ これは頼りになるなあ。よし、喧嘩はこの女に任せて俺は食事に戻ることにしよう。

「おいアニキ、どうやらこいつが強いってのはマジみたいだぞ。嘘をついている感じでもないし、今までビビり散らした皿洗いの心拍数が一瞬にして正常値にまで落ち着いた。よほど信頼を置いてないと、こうはならねえ……」

「そういやこいつの顔、見たことがある。確か王宮の魔術師どもから『期待してます』って言われてた。つてことは、まさかSレア以上の？ ……くそつ、覚えてやがれ！」

どうやらあいつらはこの女に恐れをなして逃げ出したようだ。なんにせよ助かった。

尻尾を巻いて逃げていくチンピラどもを見送ると、この女はふう〜と長い溜息をついて俺の隣の空いている席に腰掛けた。

「……ああ、怖かった〜！ 最後の勇者君、それとも最後の皿洗い君って呼んだ方がいいかな？ とにかくサポートしてくれて助かったよ！ 君、あの状況でも食事に戻れるとか、思ったよりも胆力があるんだね！」

「まあ俺は、お前がSSレアのギフトを持っていて知っていたからな。任せとけば大丈夫かと思つて……。いつかこの借りは返したいが……あまり期待はしないでくれよ？」

がちがちに震えていたのは俺だけじゃなく、この女もこう見えて結構勇気を振り絞った行動だったらしい。戦えば勝てることと、戦いに挑むことは別の問題なのかもしれないが、それでも一歩踏み出せるとは、さすがは勇者を自称するだけのことはある。

「借りなんて返さなくてもいいよ。その代わり、あのときの約束通り、荷物持ちとして私を手伝ってくれるつもりはない？ もちろん分け前は半々で！」

「それは願ってもないことだが……お前のパーティーメンバーは、俺なんか突然入ることを認めないだろ」

「それなら心配ご無用だよ。そのパーティーはついさつき解散したばかりだからね！ 要するに、方向性の違いとかがつてやつで」

いや、ついさつき解散したつて、まだこの世界に来た初日だろうが。なんでそんな短期

間で「結成↓解散」の流れを踏めたんだ？ アマチュアのバンドでもう少し長持ちするだろうに……」

「それで皿洗い君、どうする？ 私についてくるつもりはある？」

「そういうことならぜひ頼みたい。だがそれなら、いつまでも皿洗い呼ばわりはやめてくれ。事実とはいえ、言われてあまりいい気はしないからな」

「そうだよね。でも私は君の名前を知らないや。……えっと、私はアカリ。水音朱理^{みとあかり}、ピチピチの十七歳、高校二年生だよ！」

そう言っつて、アカリはステータスカードを取り出し、ステータスを表示させた状態で手渡した。

水音朱理

年齢：17

レベル：1

ギフト1：神靈術^{シャーマン}

カードを確認すると、名前と歳以外に、ギフトの内容も書いてある。

シャーマンというのがどのようなギフトなのかは知らないが、SSレアと言っていたし、

優秀なギフトであるのは間違いないだろう。しかし、ステータスカードを見せられたのなら、俺も見せた方がいいのだろうか……

まあそもそも大恩のある相手に対して隠し事をするというのも心苦しいし、俺もいつまでも一人で秘密を抱^かえていたくないと考えていたところだ。ギフト2の秘密を共有するという意味でも、俺のカードも見せてしまうことにしよう。

「じゃあ、これが俺のカードな。念のためっつてことで確認しておいてくれ」

明野樹

年齢：17

レベル：5

ギフト1：洗淨魔法

ギフト2：聖剣^{ホム}／魔剣^マ召喚

スキルポイント：10

あれ、気づいたらなんかスキルポイントとかいう項目が増えてる。なんだこれ。テーブルの上にカードを置いて、表示されたステータスを確認することにした。

「えっと……イツキ君っつて名前で、私と同じ年だったんだ。なんとなく年上だと思っつて

立ち読みサンプル はここまで